

日英語の色名と色カテゴリーの壺  
—日本語の色名の特徴を中心に—

関西外国語大学（短期大学部）名誉教授 吉村耕治

虹の色は、現代日本語では「赤橙黄緑青藍紫」の七色で覚えられているが、英語では“red, orange, yellow, green, blue, indigo, violet”で、中国語では「紅橙黄緑藍靛紫 hóng chéng huáng lǜ lán diàn zǐ」の七色で覚えられている。虹の表現では、日本語と中国語では紫を用いるが、英語では purple（深紅色）ではなく、violet（スミレ色）を用いるという色名上の相違が見られる。中国語では赤が「紅 hóng」、青が「藍色 lánsè」、藍色が「蔚藍色 wèilánsè」、紺色が「藏青色 zàngqīngsè」と呼ばれ、日本語と中国語においても微妙な違いがある。さらに、明治初期の師範学校『小学読本』巻四では、「紫・紺・淡青・緑・黄・樺色・赤」の七色で、橙が樺色、青が淡青、藍が紺と表現されている。紫色も purple も赤と青の中間色を表すが、英語では violet の色域が非常に限定的であるのに対して、purple の色域は広い。日本語でも紫には赤紫色と青紫色があり、意味が広い。これらには色カテゴリーの問題が潜んでいる。そこで、言語文化論の視点から、日本語の色名の特徴を中心にして、Berlin & Kay (1969) の説とその修正の説や、英語における光に対する闇の優位性、日中英語の基本色名の意味や体系上の相違、さらに、日本の節分に登場する鬼（赤鬼・青鬼・黒鬼など）と英語の demon（悪魔）の色彩の相違などについて言及したい。

講演者紹介



関西大学大学院修士課程（英文学専攻）修了、関西外国語大学大学院博士課程（言語文化専攻）単位修得退学。関西外国語大学短期大学部、講師・助教授・教授を経て、2015年4月に名誉教授。関西大学（法・文・商・総合情報学部）非常勤講師。

一般社団法人 日本色彩学会（編集委員・関西支部顧問・幹事）、表現学会（理事・監事）、日本文体論学会（常任理事）、テクスト研究学会（事務局長・編集委員）、日英言語文化学会（理事）。

編著書『英語の感覚と表現—共感覚表現の魅力に迫る』三修社、2004；編書『言語文化と言語教育の精髓—堀井令以知教授傘寿記念論文集』大阪教育図書、2006；『現代の東西文化交流の行方—国際化と世界化の光と影』大阪教育図書、2008；『現代の東西文化交流の行方 II—文化的葛藤を緩和する双方向思考』大阪教育図書、2009、など。